

Live The Nembutsu

お念仏に生かされて

【第 16 回世界仏教婦人会大会】 基調講演

米国仏教団ストックトン仏教会駐在開教使

もと よし ゆ き こ
本 好 由 紀 子

以前、日本人は謝罪でスピーチを始めるが、アメリカ人はジョークで始めるということを聞いたことがあります。私は日本生まれですが、国籍はアメリカで、50年以上もハワイ、アメリカ本土で暮らしております。しかしながら、スピーチの前に適しているジョークをまったく知りません。そういうわけで、本日のお話は、謝罪ではじめたいと思います。最初に、世界仏教大会のお話のお電話をいただきましたとき、最初に発した言葉は、「ノー」でした。この「ノー」は、建物を揺るがすほどの大きなものでした。私よりすぐれた方々が多くおられるのに「なぜ私が」と思いましたが、どうしても断りきれませんでした。ただ、そのショックで、その後の会話は憶えておりません。今日、ここに立っておりますが、不安と申し訳なさで一杯です。

今日、この会場に来られた方々は、素晴らしいお話を期待していると思います。本当に申し訳ありませんが、私は、特別の経験や非凡な才能を持った人間ではありません。私は、普通の、平々凡々の名も無い人間です。皆様の期待の十分の一をも満たすことはできませんことを、お詫び申し上げます。ただ、凡人の私のお念仏の味わいを、恥ずかしながらも今日、ここでお話させていただきます。

私の人生を振り返ってみますと、実に多くの方々との出会いがあり、お導きがあったと感謝しております。その方々のお名前、お導きを、ここであげますと、数年かかると思います。そこで、本日は、お念仏をいただいた私の人生の中での二人のことをお話したいと思います。一人は、私の祖母、もう一人は私の父です。

私は幼い頃から、劣等感と戦ってきました。そして家族の中で、一番才能が無い人間だと確信しておりました。

私の父は才能にあふれており、頭も良い人でした。ハワイの学校では、あまり勉強しなくとも学年を二回も飛び越えております。音符は読めませんでしたが、聴いただけでハーモニカやオルガンでその曲を演奏することができました。また絵も上手で、私が幼い頃は、色々な漫画を描いてくれていました。その一つ一つは、プロが描いたような出来映でした。墨絵もレッスンを数回習っただけで、色紙に上手に描くことができたのです。さらに運動神経も大変よく、中学校の水泳大会ではバタフライの新記録をだし、しばらくはその記録は破られなかったそうです。少林寺拳法では黒帯を獲得し、瓦を最高で18枚、素手で壊したそうです。これらの事を成し遂げることは、父の身体のことを考えますと大変なことです。父は幼い時、カウアイ島で、サトウキビ運送の列車に轢かれ、もう少しで右足を切断するほどの事故にあいました。第二次世界大戦の際、父は身体検査の結果、丙種^{へいしゅ}、つまり兵士としては下級とされたのです。そんな丙種^{へいしゅ}の父が兵隊に招聘^{しょうへい}されたのは、終戦の間際の絶望的な状態になった頃でした。

私の母も才能のある人です。棒編み、かぎ針編み、文化刺繍、洋裁、和裁、墨絵、等々、指先の器用な人です。私の憶えている限り、いつも「何かを習おう」という生き方をしている母でした。父が引退してから、板東流の日本舞踊を習い始め、90歳という年齢で板東流の名取を獲得いたしました。今母は、102歳で健在ですが、現在では英語の単語の勉強に励んでおります。

私の妹。彼女が、私の持つ劣等感の一番の原因だと思います。私の妹は、勉強、音楽、美術、全ての分野において私よりすぐれております。小学校の時、学校全員の絵画コンテストがありました。全生徒が遠足に行き、そこで絵を描いたのですが、その時の私の絵は、自分ながら上手に描けたと思いました。周りの友たちの絵を見ても、自分の方が上だと傲慢にも思いました。しかし賞をもらったのは、妹でした。4分の3しか描くことできなかつたにもかかわらず。また、各学年の代表者からなる、合唱団を作った時も、妹は選ばれましたが、私はもちろん入りませんでした。妹は成績が優秀で、いつもクラスの上位にいらっしゃいましたが、私は中ぐらい、または下から数えたほうが早いぐらいでした。

年齢は妹より私の方が一歳上ですが、学校では「本好の姉」と呼ばれていました。つまり、妹の方が知られていたのです。それに加え、妹は容姿端正です。ハワイに移って6年後、日本に旅行し、中学校のボーイフレンドに会いました。楽しい一日になるはずでしたが、彼は一日中、妹がどれだけ美人なのかをしきりに口にします。私のエゴが、どんなに木っ端微塵に砕けてしまったかは、ご想像していただければと思います。

普通ならこのような環境で育つと、うつ病になっても不思議ではないのですが、私には、祖母と父がおりました。

私は長い間、祖母の一番ひいきの孫でした。その一つの理由は、私が父にそっくりだったからだだと思います。父をハンサムだと言う人は、この世に三人おられます。父自身、妻である私の母、そして父の母。つまり私の祖母です。父はその一生を通じて、本好家に色々とトラブルをもたらした人です。しかし、祖母は必ずそんな父をかばいました。それは、父が長男だったからだだと思います。そんな父に、私はそっくりでした。そんな可愛い息子に似た私を、嫌いになるわけがありません。そしてもう一つの理由が、私に対しての同情ではなかったのかなと思います。何でもできる妹に対して、何をしてもできない私を可哀そうにと、そのままの私を受け止めてくれたのだらうと思います。どんな平凡な命でも、自分をそのまま受け止めてくれている人がいることを知るにより、安心感が生まれます。祖母のおかげで、私の存在そのものが肯定されたのです。

若い頃は皆、年上の言うことを聞くことに抵抗があると思います。しかし、祖母の言葉は素直に聞くことができました。祖母は、無常、縁起、因果等の仏教の基本を教えてくださいました。例えば、祖母はよく一粒の米には、六人の仏様がいらっしゃると言っておりました。つまり、一粒の米には、数え切れないほどの生きとし生けるものの命が込められていると言う縁起の教えです。また、毎朝本堂に通じる廊下を雑巾がけすることを義務づけられました。それに対して文句を言うと、何もしなければ何の効果を得られないと諭されました。因果の教えです。まさに、仏教入門のレッスンでした。

私に自信をもたらしたもう一人は、父でした。父は「お前は本好家の者だ」とか「お前は、好善寺の孫だ」と、よく私に言い聞かせておりました。本好家、好善寺がどれほど重要なのかはいまだにわかりませんが、私は一人ではない。誰かに、なにかに繋がっている思いを抱かせてくれました。

もちろん、私の母や妹、周りの人たちが意地悪で、私を無視していたというわけではありません。それどころか、愛のあふれる家庭で育ち、周りの人たちには親切にさせていただきました。ただ、祖母と父は、私の劣等感から生じた痛み、苦しみを和らげてくれた重要な二人でした。もちろん、本当にその苦しみを乗り越えるには、お念仏が必要でしたが、それはもう少し後でお話しましょう。

私は寺族として生まれましたが、仏教に深く接して育ったわけではありません。確かに父は、いつも私たちが仏教徒であることを繰り返しておりました。クリスマスツリーもありませんでしたし、神社のお祭り行くこともいい顔をしません。日本にいた時は、元旦のお勤めを除いては、法要に出たことはありませんでしたし、法話も聞いたことはありませんでした。しかし、ハワイに移ってからは、全てが変わりました。お寺の境内に開教使宅があるため、どんなに眠たくとも日曜礼拝には出なくてはなりませんでした。しかも、日本語が分かるため、日英両方の法話の席に座ることを強制されました。嬉しかった？答えは「ノー」です。だからでしょうか。高校を卒業し家を出てしまうと、仏教から遠ざかりました。それどころか、私はアンチ仏教になりました。休み等で家に帰った時は、仏教をひどく批判しておりました。しかし不思議なことに、そんな私に対して父は怒ったり、反論したりはしませんでした。ただ、悲しそうな顔をしていたのです。

大学を卒業する一年前、再び劣等感に悩まされ、途方にくれました。そんな時、仏教の教えが私の行くべき道を教えてくれたのです。

両親と一緒に住んでいるとき、嫌々に法要、日曜礼拝に出ていたのですが、み教えは知らず知らずに私の中に染込んでいったのでしょうか。長い間、あんなに拒絶し続けたみ教えが、意味を持ち始めたのです。み教えは私の心を開いてくれ、私自身だけではなく、私の周りをもっと明瞭に見る目をくれたのです。み教えは、私の悩みの原因を認識させてくれたのです。私の悩みの原因は、私自身だったのです。私自身が、自らを闇においやり、その闇に強くしがみついていたのです。その時の開放感を今でも憶えております。

「業が深く、救いようがない者は寺族として生まれる」ということを、聞いたことがあります。その様な者が救われるには、お寺の環境のもとに生まれるしかないということです。私にとって、これは真実です。もし寺族の一員として生ま

れなかったら、仏教徒にはならなかったでしょう。私は怠け者ですので、もし寺族として生まれなかったら、お寺には足をはこばなかったでしょう。

私は開教使になりましたが、父の後を継ぐというより、私自身のために開教使になりました。仏教の勉強するにあたり、先に日本には行かず、ウィスコンシン大学院であることを選択しました。ハワイで布教するには、英語で仏教を勉強するのがいいという父のアドバイスに従ったからです。

しかしそこで、再び劣等感に悩まされることになりました。ウィスコンシン大学院には、優秀な生徒が多くいました。皆、博士号を目指す人たちで、私一人だけが修士課程でした。彼らは、サンスクリット語、中国語と日本語の古文を難なく読むことができました。彼らの教授への質問は難しく、私には理解できませんでした。私の未熟さ、無能さが明確になったと思いました。そんな時、私は『観無量寿経』(以下「観経」とする)に出会いました。「観経」は、浄土三部経の一つで、実の息子に夫を殺され、自分自身は牢獄に入れられ嘆き悲しんでいる韋提希夫人に、お釈迦様が、阿弥陀如来とお浄土等の莊嚴を観想する十六の方法を説いたものです。

このお経の最後に書かれている九品の章に、私は心をひかれました。このお経によると、人は機根の違いによって、九つの階位に分けられ、浄土に往生するには九つのパターンがあるということです。一番上位の上品上生とは、大乘仏教を行ずる人で、三心、つまり、至誠心、深心、回向発願心を得た人たちで、命終えた時はすぐに浄土に生まれることできる人たちです。最下位にいる人たちは、五逆、十逆などの悪行で、悟りを開くことのできない人たちです。悪行とは、殺生、盗み、うそをつく事等を言います。彼らは、真に仏道を行ずる事のできない人たちです。私は、まさにその人に当てはまるのです。うそは日常茶飯。誰かが犯した間違いは、「大丈夫ですよ。気にしないで」といいますが、心の中では、皆様にはお伝えできないようなことを思っております。また他の命を取らなければ、生きられない私の存在等々。まさに下品下生の人間です。

最下位である、下品下生は、救われない絶望の存在。彼らには、真の心などありません。にもかかわらず、阿弥陀如来の救済からは外されていないのです。阿弥陀如来を念ずることもできなくとも、ただ如来の名前を称えることで、救われ

るのです。真っ暗闇の中で、わずかながらも明るい光を見出したように感じました。浄土真宗の教えは、私のような未熟で、つまらない人間のためだと感じました。

そして、親鸞聖人の『教行信証』の「信巻」で次のお言葉に出会いました。

『悲^{かな}しきかな愚^ぐ禿^{とく}鸞^{らん} 愛^{あい}欲^{よく}の広^{こう}海^{かい}に沈^{ちん}没^{もつ}し名^み利^りの太^{たい}山^{せん}に迷^{めい}惑^{わく}して 定^{じょう}聚^{じゅ}の教^{けう}に入^いることを喜^{よろこ}ばず 真^{しん}証^{しょう}の証^{さう}に近^{ちか}づくことを 快^{たの}しまざることを恥^はずべし傷^{いた}むべし』

このお言葉を初めて読んだ時、すごい衝撃を感じました。私にとって、親鸞聖人は偉大なる人、完全無欠の人、真実に目覚めた人、だったのです。確かに、日曜礼拝や法要でのご法話で、親鸞聖人はご自分自身を極重悪人と呼ばれたと聞いたことがありましたし、『歎異抄』には、御自身を「地獄が住みかの者」と言われておられますが、聖人を私と同様の生身の人間としてみたことはありませんでした。まして、どろどろの情欲があるなんて考えたこともありませんでした。

しかしながら、アイデンティティクライシスと自己嫌悪から、何とか抜け出し始めたわたしにとっては、そのお言葉に救われました。私だけではない、他にも自らの闇に悩む人があることを知ることによって、勇気が湧き、仏教の勉学に励むことができました。

私がウィスコンシン大学院で専攻したのは仏教学でした。私の先生は、常に仏教は「私」で始まると言っていました。仏教を学ぶ際「私は誰だ」「私は如何なる者だ」「私は如何にして存在している」という疑問を持たなければいけないと言っていました。ご存知のように、仏教の根本真理は、無常、縁起、無我、涅槃です。これらの真理は、私たちの毎日の生活に直接かかわった時に、意義あるものになります。例えば真理が真実の私を知らせ、真の生活を営む道に導いた時、真実が真実たるものになります。つまり、いかに真実の知識があるかではなく、いかに真実に導かれて生きるかが大切なのです。

私の経験をとおして、もう少し説明したいと思います。愛する人を亡くしたとき、私は涙を流します。愛する人にもう二度と会えないということは辛いことです。その時、私は、自分自身に問いかけます。「私の涙は、亡くなった人のため？それとも、私自身のため？」答えは、「私のために流す涙」です。全ての者が永遠にあればいいと思っているため、

愛する者を失うと、その願い通りにならないことに動揺してしまうのです。その故に流す涙なのです。全てのものは無常であり、その無常なるものに執着することの愚かさに目覚める事によって、死というものをそのまま受け止めることができるのです。そして、次の瞬間へと足をすすめることができるのです。

お釈迦様がお悟りをお開きなされた時、しばらくは、その喜びに浸っておられ、しばらくはそのままお立ちにならなかつたと聞いております。しかし、結局はお立ちになられ、法をお説きになられました。私は、このことに大きな意義があると思います。仏教の教えは、ただの観念や思想に留まるのではなく、他との関係の中で実際の生活に深く関わってこそ、仏教の教えなのです。だから、仏教の教えは、この「私」から始まるのです。

この方向性のもと、私は浄土真宗を学ぶために日本へ行きました。そこでまた、壁にぶつかりました。お念仏が称えられなかったのです。

『教行信証』に、「^{しんじつ}真実の^{しんじん}信心はかならず^{みょうごう}名号を具す。名号はかならずしも^{がんりき}願力の^{しんじん}信心をせ^ぐ具ざるなり」と、あります。真実の信心が^{そな}具わっていない称名は、第十九願、第二十願の称名で、自力の念仏です。つまり、真のお念仏ではないのです。私自身に信心がないと思ったゆえ、お念仏が出なくなったのです。これ聞いた教授の一人、ひどく立腹されました。「なんと傲慢な。とにかく、お念仏を称えなさい」それでも称えない私を頑固で、傲慢であると思われたことでしょう。その生意気さ、頑固さ、傲慢さは今でも私の中にあります。

その教授は、「あなたは開教使にむいていない」と言われ、もう少しで、ハワイの開教総長に報告するところでした。それでも、私は、お念仏が称えられませんでした。私の口から出るお念仏は、うそで、空っぽに思えたのです。今から思えば、阿弥陀如来のおはたらきを、どれだけ意固地になって妨げていたことでしょうか。私がどう感じていようとも、日本の留学を終えて、ハワイに帰らなくてはなりません。

開教使としての葛藤は、一九七八年五月より始まりました。しかし、私は恵まれていました。先輩開教使、門徒の方々は、私をそのまま受け入れてくださり、辛抱強く、また優しく導き、接してくれました。私の開教使生活はそんな方々に囲まれた、本当に恵まれた環境でした。

ある時、私の友人が「なぜ、私たちは死なないといけないのか」と問いかけました。彼女は私と同じ年で、思い病気を抱えていたのです。私が知っている限りの仏教知識を話しましたが、彼女は満足していなかったようです。それもそのはずです。私が言っている事は、ただの言葉で、真実が具わっていたとは思えないからです。私は仏教の根本真理である生と死を、きちんと伝える事ができなかったのです。私は日本に戻り、浄土真宗を再び勉強せねばなりませんでした。留学中に彼女は亡くなりましたが、今でも彼女のことをよく思い出します。彼女は、移り変わる世界の中でのお念仏について、再び考えさせてくれた大切な菩薩です。

彼女のように、多くの人、多くの状況に出あえたことは、私の人生の中でのお念仏を味わわせていただく機会を多くいただいたということです。浄土真宗の開教使になる事ができてありがたいと思っております。

私は、はじめに劣等感についてお話したと思います。祖母と父のおかげで劣等感の痛みが和らぎましたが、根本的な解決法にはなりません。ただ、祖母と父は、お念仏の道をひらいてくれたおかげで、悩み、痛みを誠実に向かいあう事ができました。

私が若い頃は、よく人から「劣等感に止まってはだめよ」「忘れてしまいなさい」とか、「欠点にばかりとらわれず、自分の長所に目をやりなさい」等と言われました。しかし、お念仏の教えを聞いているうちに、劣等感とは取り除くものではなく、明かにするものだ、ということに気がつきました。お念仏によって自らをあきらかに見ることで、劣等感とは自分自身が作りあげたものだと気がついてくるのです。亡くなられた梯實圓先生が、このようにおっしゃっていました

「如来の救いとは、罪を赦^{ゆる}して帳消しにすることではありません。私たちに、自分の過ちを過ちと認めることのできる正しい智慧を与え、その罪の報いを引き受けることのできる勇氣と力を与え、自分のことしか考えられなかった自己中心的な私たちの考え方を転換して、人々の痛みを共感し、人々の幸せを願う心の尊さを知る者に育てていくことだったのです。」

過去に犯した過ちを、祈りや儀式によって取り除こうとか、赦してもらえるとという宗教がありますが、浄土真宗はまったく違います。浄土真宗においては、私たちがどんなに激しく熱心に、また、数多くお念仏を称えても、私たちの過ちが無くなりません。浄土真宗は、仏教の教えを正確に伝える宗教です。例えば私たちは仏教の根本真理の一つ、因縁、因果の教えを信じます。つまり、何か特別の存在が、特別の力を使って、私たちの犯した過ちを取り除くなどということ信じません。

お寺の本堂やお仏壇にある阿弥陀如来は、先に挙げたような超人的な力を持った存在とは違います。阿弥陀如来は、人間の形をしておりますが、親鸞聖人が言われたように、本来は色も形もない仏様です。阿弥陀如来は、色、形がある私たちの世界を超えた、無限である真如が、私たちにはたらきかけているお姿を現していると、私はいただいております。

私たちが、過去に犯した罪は、現在、または未来に果として戻ってまいります。過去を無視してしまうと、過去の行いが果として戻った時、戸惑い、あるいは怒りとなることでしょう。皆様、お寺にお参りしても、寄付をしても、お念仏を称えても、私たちの過去の過ちを帳消しすることはできませんよ。しかし帳消しにはしなくとも、私たちがあきらかに見ることのできる智慧を与えるのがお念仏です。では、私たちは何なのでしょう。

富山におられた故初瀬部真一先生が、『仏教をめぐる』という書籍の中で、四つの自分について語られておられます。四つの自分とは。

- (1) 自分が知っている自分
- (2) 他人が知っている自分
- (3) 自分も他人も知っている自分
- (4) 自分も他人も知らない自分

第一の自分とは、他人に知ってもらいたくない自分だと思います。今、ここで、私が、その第一の自分を皆様にお話しすること期待される方がおられましたら、大きな間違いです。皆様も、ご自身を深く省みてくださいます、死ぬまで知られたくない自分があると思います。

第二の自分とは、他人から言われないと分からない自分です。例をあげさせていただきます。ハワイ大学時代、私は図書館でアルバイトをしておりました。図書館の奥の部屋での仕事は好きでしたが、図書貸し出しのカウンターとか、本を棚に戻す仕事はあまり好きではありませんでした。卒業間近になった頃、妹が、他人がどの様に私を見ていたかを教えてくれました。妹が言うには、皆、私が貸し出しカウンターに座っている時を避けたそうです。なぜなら、私は不親切で無愛想な人と知られていたからです。自分では、嫌いな仕事をしているという思いはうまくカバーしていたと思っていました。それどころか、愛想は無くとも、親切で有能な人間だと思っていました。他人に言われないと分からない私自身でした。

第三の自分とは、良いにしろ、悪にしろ、自分も他人も知っている自分です。例えば、私は車のハンドルを握るとせっかちになります。のろのろ運転や、下手な運転を見るといらいらします。これは私の運転する車に乗った人たちは、皆知っていると思います。

第四の自分とは、私自身が求め、知ろうとした自分ではないかもしれませんが、無始よりこのかた、既に阿弥陀如来から、願いをかけられていた自分で、如来の無量の智慧光によって初めて知らされる自分です。この第四の自分が、本当の自分なのです。なぜかといえば、阿弥陀如来の智慧光は、我執を完全に離れており、無限で、さわりがなく、清浄な光だからです。太陽の光が照らすと、ものがよく見えます。しかし、どんなに明るい太陽の光であっても、影を作ってしまう。阿弥陀如来の智慧光は、どんなに分厚い壁でも、それを突き抜けて、世界の隅々まで照らす光なのです。この光は、私の心奥深く、真っ暗な闇である私を突き破り照らしてくれるのです。

真実の私があきらかになった時、その私を受け止めるには、本当の勇氣と力が必要です。誰が、醜さ、汚さを見つけることに喜びを抱くでしょうか。まして、それが自分自身であれば、それから目をそらさない勇氣が必要です。

しかしお念仏は、その醜い私が阿弥陀如来の救いの目当てであることを知らしめます。「このような私でも、阿弥陀如来様は、見捨てない」という思いが、真の私から眼を背けさせないのです。阿弥陀如来が、苦しみや痛みから、盾となって守ってくれるというのではなく、ただ、この私と共にあるといわれるのです。

開教使になって多くの人たちにお会いする中で、幼い恥ずかしがりやの子どもたちに会います。その場合、ほとんどの子どもは親の後ろに隠れ、そこから私を見ます。また、親に隠れずに、直接私に接する子どももいます。でも、彼らは自

分の親がどこか近くにいることを知っていて、怖くなったら親のところへ走っていける、自分を守ってくれることを分かっているのです。

しかし阿弥陀如来は、そんな親でもありませんし、私たちもそんな子どもたちではありません。もう一度言いますが、阿弥陀如来は私たちの盾になったり、良くない事から守ってくれるような存在ではありません。阿弥陀如来は、痛みや苦しみを明かに知り、それらをそのまま受け止められる力を与えてくれるのです。

皆様は、金子みすずという詩人をご存知だと思います。ここで、彼女の詩についてとか、彼女の人生について詳しくお話しするつもりはありません。ただ、私の一番好きな彼女の詩を読みたいと思います。題は、「さびしいとき」です。

私がさびしいときに、よその人は知らないの。

私がさびしいときに、お友だちは笑うの。

私がさびしいときに、お母さんはやさしいの。

私がさびしいときに、仏さまはさびしいの。

阿弥陀如来は、批判的でも偏見的でもありません。阿弥陀如来は、私の痛み苦しみのもの、全部を包んでくれるのです。金子みすずが、「私がさびしいときに、仏さまはさびしいの」と詠んだ時、そこには暖かさ、安堵、そして力強さが生じたと思います。私たちは、自らの痛みを受け止めることができた時、謙虚になり、人に対して優しくなります。本当の自分に目覚めた時、どうして他に対して、批判的になったり、厳しく接したりすることができるのでしょうか。

私は、今、102歳になる母と同居しております。5年前、母は脳卒中で倒れました。身体的には元気そうに見えます。杖を使わずとも歩けます。自分で、着替え、洗顔、食事も、皆、一人でできます。しかし、認知症が進み、娘の私が誰か分からず、時には追い払おうとする日もあります。また、同じ事を幾度と繰り返して聞きます。もし私がお念仏に出遇わなかったら、母の世話ができたかどうかわかりません。

アルツハイマー病のお母さんをお世話した娘さんから聞いた言葉です。「母の世界を、私の世界に引きずり込んではいけない」。私の母を、私の世界に引きずり込むことは、自己中心のなせる業^{わざ}です。例えば、母は17年前に亡くなった父のことをよく聞きます。私が17年前に亡くなったと言うと「そんなことはない。ついさっき見たばかりだ。あんたはうそつきだ」と怒ります。母の世界では、父はまだ生きているのです。それを正す権利が、私にはありません。お念仏は、私の自己中心性をあきらかにしてくれることで、母に反論することを自制させてくれるのです。

もちろん、いつも優しく忍耐強い私ではありません。怒り、いらいら、悲しみを抱きます。それは彼女が私の母だからです。母親とは、娘を世話するはずの人だからです。愛する人が衰退していく姿を見ることは、辛いことであり、悲しいことです。大いなる怒りがあることも事実です。恥ずかしいことですが、母に声を荒げて叱ることもあります。仕事が忙しい時や、家事で忙しい時は、特にそうなりがちです。しかし、声を上げた後、すぐ、お念仏が私を元に戻してくれます。苛立った気持ちを、お念仏が省みさせてくれるのです。痛みと後悔が生じます。母ではない、この私自身が、怒りと苛立ちの原因なのだと知らされるのです。少し、我慢強くなれるのです。そして、また、母との共に歩むことができます。

お念仏は私の行いを帳消しにはいたしません。ただ、私の痛み、苦しみの原因を明かにしてくれるのです。お念仏は、それらに真正面から向かい立つことのできる勇気と力を与えてくれるから、逃げることもなく、留まる事もなく次へと進む事ができるのです。

人生には山があり、谷があります。喜びがあり、悲しみがあり、怒りがあり、挫折があります。どんな人生に出あおうとも、私たちは、自分自身の人生の責任を取らなければなりません。

私は、いつも正しい判断をしているとはいえません。いつも、お念仏と共にあって、適切な判断をしているといたいのですが、それもできません。もちろん、お念仏によって、なんとか適切な判断ができたと思えた時たまにありました。しかし、悲しいことに、ほとんどの場合、自己中心的な判断をしてきております。ただ、お念仏によって、ほんの僅かではありますが、物事が見えてきて、適切な判断を心がけようと努力はしてきております。私の人生は、パーフェクトではなく、これからも多くの失敗を繰り返していくと思います。しかし、お念仏のおかげで、なんとか幸せな人生をおくらさせていただいております。お念仏のおかげで、この大切な人生を、私は私なりに精一杯生きようとする力をいただいております。